

第二次世界大戦後のイングランドにおけるバドミントン(1946 - 1949年) — インビクタ (H・A・E・シェール) による時評より —

鷗 木 千加子

A Study on Badminton in England after World War II (1946-1949) — Evaluation of the time by Invicta (H.A.E.Scheele) —

Chikako Ikarugi

キーワード：バドミントン，イングランド，H・A・E・シェール，第二次世界大戦後

1. はじめに

1893年にイングランド南西部のクラブによってバドミントンにおける最初の統括組織として設立されたバドミントン協会 (Badminton Association, 以下 BA とする) は、以降、競技規則の管理・運営とイングランド内外におけるバドミントンの運営を担った。1934年、バドミントンの活動を国際的にさらに普及・発展させ、国際競技連盟による国際的な統括を目指して国際バドミントン連盟 (International Badminton Federation, 以下 IBF とする) が設立されたことにより、BA はイングランドの統括組織であるイングランドバドミントン協会 (Badminton Association of England: 以下 BAE とする) となり、IBF の傘下に入った。

1930年代以降、バドミントンの活動は広く普及・発展した。特に、デンマークやカナダでの活動の拡大と競技レベルの向上は際立っていた。また、アメリカ合衆国を中心にプロフェッショナル選手およびコーチの活動が広がった。一方で、1930年代後半になると、これまで多くの大会のタイトルを獲得しバドミントンの競技力を牽引してきたイングランドの選手達は徐々に姿を消していくことになった (鷗木, 2018)。さらに、第二次世界大戦を経てイングランドの競技力の停滞は明らかになっていった。女性トップ選手として戦前か

ら戦後にわたりイングランドの競技力を牽引した B・ユーバー (B. Uber) は著書の中で、1946/47年シーズン (以下、シーズンを示す場合は 1946/47年のように表記する) のイングランドの状況について以下のように述べている。

「イングランドには、新興のデンマークに対抗するための新しい若いプレイヤーがごく僅かしかいません。また、ニコルス (R. Nichols) らのこれまでのトップ選手はプレイを止めてしまいました。(中略) 一方で、バドミントンは大変盛んに行われました。施設の確保が難しい状況にもかかわらず、戦前に比べて多くのクラブが BAE の傘下に入り、そこには以前にはなかった一般大衆への広がりがありました。」(B・ユーバー, 1949)

こうした記述からは、第二次世界大戦後のイングランドでは、競技力の停滞だけでなく戦前とは異なる活動が生じていた様子が窺える。第二次世界大戦後のバドミントンの活動に関しては拙稿 (鷗木, 2017b) にて述べているが、これは IBF の活動に着目しており、イングランドにおけるバドミントンの状況については十分に明らかになっていない。そこで本研究では、

*甲南大学 スポーツ・健康科学教育研究センター

BA および BAE 公式機関紙である『バドミントンガゼット』（注 1）に寄稿された H・A・E・シェール（H. A. E. Scheele, 以下シェールとする）の時評を史料として、戦争により中断されていた BAE の活動が再開された 1946/47 年から、第一回トマスカップ大会が開催された 1948/49 年までのイングランドにおけるバドミントンの状況について、その一端を明らかにすることを目的とする。

2. 第二次世界大戦直前直後のイングランドバドミントン協会

1) イングランドバドミントン協会の運営

1939 年 9 月、イギリスがドイツに宣戦布告したことにより、BAE の活動は停滞することになった。BAE はその年の 11 月 27 日の執行委員会にて、そのシーズンの年会費免除、ハンドブックのコピー代金半額の返金、戦争中に大会が開催されない場合の大会参加費の返却、次の全英選手権大会の中止、戦時下では年次総会を開催せず現行の執行委員が継続されることが決議され、事務局長から全ての加盟団体へ通知されることになった（BAE, 27 Nov. 1939）。その後 BAE の会議は約 6 年間開催されなかった。

戦後、BAE の会議が再開されたのは、1945 年 7 月

18 日の執行委員会からである。チャリングクロスホテル（Charing Cross Hotel）がその会場となった。この戦後最初となる執行委員会では、1945/46 年は大会開催やハンドブック発行等の BAE の活動は行わないことが決定された（BAE, 18 Jul. 1945）。また、シェールが新事務局長として指名され、戦後の BAE の本格的な活動再開の準備を整えた。

2) BAE 加盟団体数の変化

表 1 は、『バドミントンガゼット』1947 年 11 月号に記載された第二次世界大戦前後の BAE への加盟団体の増減についてまとめたものである。

1939 年と 1947 年を比較すると、カウンティ協会を通して BAE に加盟したクラブ数が減少したのは 8 カウンティ協会で、合計 79 クラブが減少している。加盟したクラブ数が増加したのは 21 カウンティ協会で、合計 493 クラブが増加している。増減のないカウンティ協会は 1 つであった。また、カウンティ協会を経由しない直接加盟のクラブは、10 クラブ増加し、3 クラブ減少している。また、新たに加盟したカウンティ協会は、ジャージーとウエストモーランドであったことが記載されている（BAE, Nov. 1947, p.47）。

加盟クラブ数の多いカウンティ協会の順位において

表 1. BAE 加盟団体の変化 1939 年と 1947 年の比較（1947 年 11 月号 p.47 から鶴木が作成）

カウンティ協会		1939年	1947年	増減	カウンティ名				
		28	30	2		1939年	1947年	増減	
	カウンティ名	1939年	1947年	増減	カウンティ名	1939年	1947年	増減	
カ ウ ン テ ィ 経 由 の 加 盟 ク ラ ブ	ランカシャー & チェシャー	143	327	184	ケンブリッジシャー	16	24	8	
	ミドルセックス	163	222	59	レスターシャー	20	24	4	
	ケント	114	134	20	リンカンシャー & ルトランド	18	24	6	
	ヨークシャー	64	109	45	サマーセット	20	24	4	
	サリー	128	102	-26	ウスターシャー	13	22	9	
	ノーザンカウンティ	81	96	15	グロスターシャー	30	18	-12	
	エセックス	48	94	46	シャロップシャー	11	12	1	
	ウオリックシャー	28	49	21	ウエストモーランド	1	12	11	
	バークス、バックス & オキソン	48	48	0	コーンウォール	15	10	-5	
	ノッティンガムシャー	39	48	9	サフオーク	14	10	-4	
	デボンシャー	38	42	4	ドーセット	19	8	-11	
	ハンブシャー	47	42	-5	ジャージー	1	5	4	
	サセックス	43	38	-5	直接加盟	ウィルトシャー	5	9	4
	ダービーシャー	47	36	-11	ベッドフォードシャー	4	8	4	
	ノーフォーク	24	35	11	ガーンジー	2	1	-1	
	ハートフォードシャー	21	32	11	ヘレフォードシャー	2	1	-1	
	スタッフオーードシャー	26	31	5	ハンティンドンシャー	1	0	-1	
	ノーザンブトンシャー	12	28	16	ソサエティ	3	5	2	
						合 計	1,309	1,730	421

は、1939年と1947年には大きな差はないものの、加盟クラブの総数は、1939年に1,309クラブであったものが1947年には1,730クラブとなり、421クラブ増加している。加盟クラブが減少したカウンティ協会は南部に多く、とくにサリーにおいては26クラブが減少した。中部から北部にかけては、ダービーシャーで11クラブ、サフォークで4クラブ減少しているものの、ほとんどのカウンティ協会において加盟クラブが増加している。特に増加したカウンティ協会は、ランカシャー&チェシャー、ミドルセックス、ヨークシャー、エセックス、次いでケント、パークスバックス&オクソン（パークシャー、バッキンガムシャーおよびオックスフォードシャー）であった。

3) 大会開催とイングランドの競技力

表2は、1938/39年および1946/47から1948/49年迄の、『バドミントンガゼット』に開催告知または結果が掲載されたイングランドにおける大会数の変化を示したものである。

イングランドにおいては、戦後にカウンティレベル

より小規模な大会が減少し、復活の兆しが見えない。全英選手権大会は1939年以降、戦争による中断を経て、1947年3月に再開された。体育館施設確保が困難な中、戦前に会場として使用されていたホーティカルチュラルホール（Horticultural Hall）から北ロンドンにあるハリンゲイアリーナ（Harringay Arena）へ会場を移して開催された。ハリンゲイアリーナは12,000人収容可能であり、夜の時間帯に試合を行うことで人々が観戦しやすくなることを狙った（BAE, Summer 1947, p.92）。ところが大会前日の晩にロンドンがイングランドの南部がこれまで経験したことがないようなブリザードに襲われ、アリーナの屋根から換気口を飛ばし、床が1インチの雪で覆われたことにより、大会の運営は困難を極めた。しかしながら、デンマーク10名、インド2名、スウェーデン2名、アイルランド9名、スコットランド1名とう合計24名というイングランド以外からの参加があり、これらの海外からの参加選手が見せる素晴らしいプレイは、この大会を大いに盛り上げた（BAE, Summer 1947, p.92）。

表2. 1946/47から1948/49年迄の、『バドミントンガゼット』に開催告知または結果が掲載されたイングランドにおける大会数の変化

シーズン	イングランド(BAE)内					計
	ナショナル	エリア (東西南北)	カウンティ	カウンティ より小規模	その他	
1938/39	1	5	32	53	1	92
1946/47	1	3	23	15		42
1947/48	1	4	30	12	1	48
1948/49	1	3	18	12	3	37

表3. 1930年から1939年および1947年から1949年までの、全英選手権大会の優勝者

年/種目	男子シングルス	女子シングルス	男子ダブルス	女子ダブルス	ミックスダブルス
1930	ヒューム(ENG)	バレット(ENG)	デブリン&マック(IRE)	バレット&エルトン(ENG)	H・ユーパー&B・ユーパー(ENG)
1931	デブリン(IRE)	バレット(ENG)	デブリン&マック(IRE)	ホールズリー&B・ユーパー(ENG)	H・ユーパー&B・ユーパー(ENG)
1932	R・ニコルス(ENG)	L・キングズバリー(ENG)	ヒューム&ホワイト(ENG)	バレット&L・キングズバリー(ENG)	H・ユーパー&B・ユーパー(ENG)
1933	ホワイト(ENG)	ウッドローフ(ENG)	ヒューム&ホワイト(ENG)	ペル&T・キングズバリー(ENG)	ヒューム&B・ユーパー(ENG)
1934	R・ニコルス(ENG)	L・キングズバリー(ENG)	ヒューム&ホワイト(ENG)	ヘンダーソン&T・キングズバリー(ENG)	ヒューム&B・ユーパー(ENG)
1935	ホワイト(ENG)	B・ユーパー(ENG)	ヒューム&ホワイト(ENG)	ヘンダーソン&T・キングズバリー(ENG)	ヒューム&B・ユーパー(ENG)
1936	R・ニコルス(ENG)	T・キングズバリー(ENG)	L・ニコルス&R・ニコルス(ENG)	ヘンダーソン&T・キングズバリー(ENG)	ヒューム&B・ユーパー(ENG)
1937	R・ニコルス(ENG)	T・キングズバリー(ENG)	L・ニコルス&R・ニコルス(ENG)	B・ユーパー&ドブトン(ENG)	マコナツチエ(IRE)&T・キングズバリー(ENG)
1938	R・ニコルス(ENG)	ヤング(ENG)	L・ニコルス&R・ニコルス(ENG)	B・ユーパー&ドブトン(ENG)	ホワイト&B・ユーパー(ENG)
1939	マドセン(DEN)	ワルトン(DEN)	ポイル&ランキン(IRE)	ダイスグラード&オールセン(DEN)	R・ニコルス&ステープルス(ENG)
1947	C・ジェブロン(SWD)	M・ウツシング(DEN)	T・マドセン&P・ホルム(DEN)	T・アーム&K・ソーンダール(DEN)	P・ホルム&T・アーム(DEN)
1948	J・スカールupp(DEN)	K・ソーンダール(DEN)	P・ダベルスティーン&B・フレドリクセン(DEN)	T・アーム&K・ソーンダール(DEN)	J・スカールupp&K・ソーンダール(DEN)
1949	D・フリーマン(USA)	A・ヤコブセン(DEN)	オーイ・テック・ホック&テオ・セン・クーン(MYS)	B・ユーパー&Q・アレン(ENG)	G・ステファンズ&P・ステファンズ(USA)

表 3 は、1930 年から 1939 年および 1947 年から 1949 年までの、全英選手権大会の優勝者である。

この表からは、1930 年代はほとんどの種目においてイングランドの選手が優勝していたことがわかる。しかし、1939 年にはデンマークが台頭しイングランドはミックスダブルスのみの優勝に終わり、戦後最初の大会である 1947 年にはイングランドは全ての種目においてタイトルを手放すことになった。1949 年には女子ダブルスにおいて B・ユーパーと Q・アレンが優勝したものの、1939 年から陰りをみせたイングランドは、戦後には競技力の「中心」にはないことが明らかである。

3. H・A・E・シェールについて

1) H・A・E・シェールの経歴と功績

シェールの経歴と功績については、これまで拙稿で取り上げてきたが(鶴木, 2007)(鶴木, 2017b)(鶴木, 2018)、インビクタとしての時評発信の背景を踏まえるために、いま一度彼の経歴や功績について確認しておきたい。

シェールは、選手として際立った戦績はないが、運営者としてバドミントンに大いなる貢献をした人物である。運営者としてのシェールの活動は、1935 年のケントバドミントン協会の事務局長、財務担当、マッチセクレタリーへの就任から始まった。1937 年 11 月、IBF の設立時から事務局長を務めていた F・W・ヒクソン (F. W. Hickson) の死去に伴い、1938 年の役員改正において事務局長に抜擢された。これは、E・トレバー＝ウィリアムズ (E. Trevor = Williams) (ウェールズ) との間の投票により、10 対 6 でシェールの事務局長就任が決定 (IBF, 29 Jun. 1938) しているが、その背景には、イングランド中心で行われていた IBF の運営に対して少なからず不満を感じ、体制の変更を試みた一派の存在を見いだせる (鶴木, 2018)。そのような中で IBF の運営に関わるようになったシェールであるが、その後事務局長として 1976 年まで、さらに顧問副会長 (1976-81 年) を務め、長年にわたり IBF の運営に携わった。BAE においても、事務局

長 (1945-70 年)、財務担当 (1945-49 年)、公式機関誌『バドミントンガゼット』編集者 (1946-70 年) を務めている (Davis, 1983, pp.147-148)。1945/46 年には、シェールはケントカウンティ協会代表、BAE 事務局長、BAE 財務担当、IBF 事務局長という立場においてバドミントンの運営に関わっており、戦後のバドミントンの再開に携わった。

また、第二次世界大戦下においては、トマス卿 (Sir. G. A. Thomas Bart.)、シェール、D・L・H・マーサー (D. L. H. Mercer) が役員として IBF の運営に関する活動を続けたことによって、IBF は大きく加盟団体を減らすことなく存続し、1948/49 年には第一回トマスカップ大会を開催する等、戦争終結後の活動をスムーズに再開させることができた。その貢献が、第二次世界大戦後も彼らが IBF の中心にとどまり、その後 1955 年まで続く運営体制を確立することになった (鶴木, 2017b)。IBF 事務局長としてのシェールの貢献は大きなものであったと言える。

さらに、世界女子団体大会であるユーパーカップ大会については、B・ユーパーからのトロフィー寄贈と大会設立の申し出はすぐに IBF および BAE の賛同を得られなかったが、シェールの調整によってニュージーランドから IBF へ再提案され、設立にこぎつけることができた (鶴木, 2015)。

以上の通り、シェールは 1930 年代半ばからケントというイングランドのカウンティ、イングランド、そして国際的なバドミントンの運営に尽力し、1980 年代初期までバドミントンの運営に影響力を持ち続けた人物であったと言える。

2) インビクタとしての寄稿

シェールは IBF 事務局長、BAE 事務局長、『バドミントンガゼット』編集者の各々の立場において、『バドミントンガゼット』に記事を掲載しているが、その時々々の時評についてはインビクタというペンネームを使って寄稿していた (Davis, 1983)。インビクタによる最初の寄稿は、戦後最初の発行となる 1946 年 11 月号のことである。タイトルの「チャリングクロスか

ら」は、1945年7月8日に約6年ぶりに開催されたBAE執行委員会、また1946年7月に約6年ぶりに開催されたIBF年次総会等、戦後のバドミントンの活動(会議)が再開された会場であるチャリングクロスホテル(London, W. C. 1)から名付けており、戦後のバドミントンの復興という意識が込められていることが窺える。

本研究では、インビクタによる最初の寄稿から、第一回トマスカップ大会の報告がされた1949年の夏号までに寄稿された17回分について分析を行った。表4は、インビクタによる寄稿の内容である。インビクタによる寄稿のテーマは、バドミントンの国際状況の報告、バドミントンの国内状況の報告、バドミントンの技術・戦術、バドミントンの運営、人物紹介等のように様々であった。また、現状の問題意識、現状の評価・分析等、幅広い意見を発信し続けた。

4. インビクタによる時評にみるイングランドのバドミントンの状況

1) イングランド各地域の状況

1946年11月号では、ウォリックシャーの活動の様子が伝えられている。シェールは、バーミンガムのインペリアルホテルで開催されたウォリックシャーバドミントン協会の年次総会に、ウォリックシャーバドミントン協会事務局長であるウィンドル少佐(Major J. B. Windle)に招待され出席している。ウォリックシャーでは、レミングトンやラグビーからの参加はないがコベントリーで盛んであり、世界的にシャトルや施設が不足する中でも、カウンティリーグやジュニア競技会の開催など戦前の機能を可能な限り再開しようとしていた。このジュニア競技会は、クラブのペアによる勝ち抜き戦で、プレーイング・オフについて自らアレンジができる人達に限定している。このトーナメントのスタイルは、ほかのカウンティにおいても有効であると述べている(BAE, Nov. 1946, p.23)。表1によれば、ウォリックシャー協会加盟は21団体増加しており、熱意と工夫を持って活動再開に取り組んでいたことがわかる。

1946/47年12/1月号では、ウスターシャーの様子が伝えられている。ウスターシャーには、活動の中心となる大きな町がないにもかかわらず、戦前に協会が熱心な活動をしていた。戦後それらの活動は停滞したが、それでもノッティンガムシャーとのインターカウンティを再開させようとしていた(BAE, Nov.1946, p.23)。活動の中心はバートグリーンスポーツクラブ(Barnt Green Sports Club)であり、1946年12月に第14回ウスターシャー選手権大会が開催された。このクラブでは、ローンテニス、テーブルテニス、ダンス、カード、ミュージカル、演劇等が行われ、バドミントンコートは2面しかなかった。そのためコート不足は否めないものの、クラブ執行委員の尽力で周辺に宿泊施設を見つけ、食べ物を提供するのが難しい中でもクラブ施設において素晴らしい食事を提供したり、トラブルが起きた時に対応をサポートするなど、素晴らしいもてなしがされた。また、戦前から事務局長とレフェリーを務めたクリスティー(Christie)が引退し、廃墟を引き受けたバートグリーン事務局長でもあるバスフォード(Basford)への交代はとてもスムーズに行われた(BAE, Dec./Jan.1946/47, p.45)。表1によれば、ウスターシャー協会の加盟は戦後に9団体増加したとはいえ22団体であり、決してバドミントンの活動が盛んなカウンティとは言えない。しかし、バートグリーンスポーツクラブを中心として、活動再開を積極的に進める動きが起こっていたことがわかる。

1947年春号では、イングランドにおける活発なクラブとしてウエストサセックス南海岸の町にあるリトルハンプトンクラブ(Littlehampton Club)が取り上げられている。コーヴィ大佐(Colonel D. G. Cowie)が事務局長を務めるこのクラブでは、シーズン始めに自クラブのトーナメントを開催、1月には通常ワーシング(Worthing)で開催されるウエストサセックス選手権にコートを貸し出し、2月にはホヴ(Hove)に代わりサセックス選手権大会を開催、その4週後にはサセックスのディストリクト大会(地域限定大会)を開催した。さらにそれらの試合が続く間でも、

表 4. インビクタによる寄稿の内容 (1946年11月号-1949年の夏号)

年度	月	内容
1946	11	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後最初のIBF年次総会の様子(よく知る顔に再開できた笑顔で溢れている。多くの場合、7、8年ぶりの再開。) ・メキシコにおけるバドミントンの後退は残念(過去7年間において、メキシコ協会副会長でメキシコシティ在住のイギリス人であるMr. E. H. E. Bourchierのリーダーシップにより、バドミントンのエキシビションがメキシコだけでなくテキサスやカルフォルニアで数多く実施された。) ・年次総会後に開催された恒例のトマス卿の午餐会の様子 ・午餐後はウィンブルドン観戦(フランスMathieu夫人が出場) ・クリステンセン(デンマーク)は多くの友人と再開 ・ワーウィックシャー事務局長Major J. B. Windleに、バーミンガムで開催されるカウンティ協会年次総会に招待された。会議の議題の一つは、シヤトル不足について。 ・バーミンガム市内の様子 ・ウォーセスターシャーのバドミントンの状況 ・アイスランドのバドミントンの状況
1946-1947	12-1	<ul style="list-style-type: none"> ・12月初旬に第14回ウォーセスターシャー選手権大会を開催したパートグリーンスポーツクラブについて。 ・ウォーセスターシャー協会事務局長及びレフェリーのクリステイーの引退と、公認のパスフォードについて ・トーナメントと参加選手について ・「選手権トーナメント」と「オープントーナメント」の違いについて ・BAEからのドイツ派遣について ・トマス卿の体調について
1947	Spring	<ul style="list-style-type: none"> ・国中がホール不足であるにも関わらず、3ヶ月前と比較してプレイが増加(毎週のようにクラブが新たにあちこちに設立) ・完全なコートの大きさを確保できず、用具の確保も難しい状況にある(高さ不足に関連する問題について)。 ・ノーザン選手権について(北部のバドミントンの状況、ランカシャー、チェシャーの熱意) ・ダブルインターナショナルズについて(テニスとバドミントン) ・このカントリーにおいてとても活発なクラブである、リトルハンプトンクラブについて ・施設(ホール)不足により、古くからのトーナメント会場に変更が必要となる ・スコットランドの復活について(再開するのに時間がかかった)
1947	Summer	<ul style="list-style-type: none"> ・Mr. Sinwellの劇的なカットdrastic cutsは選手も観客も不快にする。 ・全英大会のプリザードの影響について ・海外での大きな試合(全英大会にデンマーク10人、インド2人、スウェーデン2人、アイルランド9人、スコットランド1人というバドミントンにおける「外国人」が24人参加) ・ラッキードロー(2人のインド人がシングルスで3回戦で対戦したことに対して、余り好ましくないというコメントがメディアから寄せられたことへの意見) ・インドからの訪問者紹介 ・コニー・ジェブソン(過去にデンマーク代表であったためスウェーデンに拠点を置いていながら代表になれない)とヘルジ・ポール(コート外での奇妙な服装) ・デンマークの競技力及び選手について ・問題(Miss Tony Olsenが、トーナメント10日前にMrs. Gunnar Ahmと名前を変更した。過去全英大会優勝があるため、記録に別々の名前が残る。) ・驚きの優勝者(女子シングルスファイナリストのデンマーク2人について) ・ミセス・ユーバーかわいいそうな運命(試合中の怪我) ・多くのシード選手の敗退 ・前チャンピオンの登場(全英大会が8年間途絶えた後に、11人の過去のタイトル保持者が会場にあらわれた)
1947	11	<ul style="list-style-type: none"> ・ニコルス実績まとめ ・サイエンティフィックプレー(ニコルスは科学的な道筋で上達してきた) ・海外遠征(海外遠征したセントカウンティチームのデンマーク遠征・・・カウンティチームとしての初めて) ・インドと南アフリカ(デンマークチームのインドへのツアーの噂。南アフリカがヨーロッパ強豪国からの遠征を待望) ・新たに3つの国で設立(ベルギー協会、北ローデシア協会、南アフリカ協会) ・日本から、新たな組織を設立するためにハンドブック送付の依頼をうけた。
1947-1948	12-1	<ul style="list-style-type: none"> ・インターナショナルトライアルマッチが北対南という初めてのスタイルで実施。 ・不安からくるハンディキャップ(バドミントンの心理的な面の大きさは、コートの小ささからくるか、対戦相手の顔にあらわれる表情がはっきり見えることが理由か) ・緊張に打ち勝つことはできる ・北対南(パートグリーンスポーツクラブでのファイナルトライアル) ・チームプレーの優位性(バドミントンは速いゲームであるので、パートナーとの間で完全に理解しあっていることが成功には不可欠なスポーツである) ・いまはありえない賞賛(過去には国籍が異なる人が試合でペアとなることができる機会があったが、現在はペアを組む事ができなくなった)

年度	月	内容
1948	2	<ul style="list-style-type: none"> ・対スコットランド戦のメンバーとして選出された3人について ・補欠選手 ・どのようなペアになるのか? ・ハムステッドのピックエントリー (400人のエントリー) ・トーナメントセクレタリーの日誌(仕事内容について)
1948	3	<ul style="list-style-type: none"> ・最も栄誉ある記録(夫婦でミックスダブルスを組んでトップ選手として活躍することは珍しかった) ・完全なオールラウンドプレイヤー
1948	4	<ul style="list-style-type: none"> ・長年の全英大会の中で、誰も病気や怪我で試合を欠場した人がいなかった。しかし、トーナメントの中で、デンマークのトップ選手3人が怪我または病気の影響を受けた。 ・ソーンダール(デンマーク)の業績 ・輝くスウェーデン人 ・シングルの新しいチャンピオン(スカールupp) ・ダブルスのチャンピオン ・戦前の勝者(アーム) ・印象的なデビュー(ミセス・ユーバーに勝ったスペンドセン) ・出発を急ぐ(スウェーデンの2人が船をまたせる) ・アイルランドとスコットランドの友人達(アイルランドのミセス・スワンとスコットランドのマッケインは全英大会ミックスダブルス出場) ・イングランドにおける残念なこと(イングランドの少ない勝利) ・若い世代
1948	summer	<ul style="list-style-type: none"> ・インドにおけるマレーシア選手の成功について(サミュエル、デュライ、レオン)。マラヤと選手についての紹介。 ・トマスカップ展望(マラヤの状況を記載し展望を述べる)
1948	10	<ul style="list-style-type: none"> ・BAE総会でのウッドショットに関する議論について ・BAEの運営や権限について知識不足との指摘 ・競技規則に目を通す選手の少なさにより、誤解や不理解がおこることの指摘 ・競技規則14条の記載 ・ウッドショット及び関連競技規則変更についてのコメント
1948	11	<ul style="list-style-type: none"> ・トマスカップについて(大会の簡単な説明とイングランドの状況) ・イングランドチームの選出の難しさについて ・イングランドのダブルスのペアについて
1948-1949	12-1	<ul style="list-style-type: none"> ・トーナメントレベルでプレイするメンバーがカウンティマッチに出なくなっている事実について(※純粋に強さを求めることを期待している姿勢への批判、カウンティ代表に求められる名誉の役割、特に南部において) ・運営に関する指摘(選手選考に関するルールに関する解釈の違いについて) ・カウンティマッチの現状に関する指摘(ファーストチームへの選出とセカンドチームにいる選手のファーストチームへの選出のルールの意図等について) ・セカンドチームの設置された目的とあり方について
1949	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ノッティンガミアンからの10月号のインビクタのウッドショットの記事に関する反論 ・インビクタからのノッティンガミアンへの返信(ノッティンガミアンの希望はすでに1939年11月号のガゼットで試されている。G・E・ミルズの記事を引用)
1949	3	<ul style="list-style-type: none"> ・トマスカップ大会マラヤがデンマークに勝利した結果 ・マラヤ対デンマークについての各マッチについての詳細な報告
1949	3	<ul style="list-style-type: none"> ・トマスカップ大会マラヤ対アメリカについて ・マラヤ対アメリカについての各マッチについての詳細な報告 ・トマスカップ大会マラヤがアメリカに勝利した結果
1949	summer	<ul style="list-style-type: none"> ・全英選手権大会のエントリー状況の変化について ・大会の状況について ・フリーマンの素晴らしい戦い ・ミセス・ユーバーの素晴らしい戦い ・マラヤのダブルスにおける勝利 ・我々の女性陣(ミセス・ユーバーとミス・アレン)の勝利 ・イングランドの他の選手について

※アンダーラインは、イングランドのバドミンントンの活動に関する内容

サセックスのカウンティマッチの全てをホストするクラブとなった (BAE, spring 1947, p.82)。表 1 によれば、サセックス協会では加盟団体が戦前に比べ減少している。リトルハンプトンクラブが多くの大会会場となった背景には、カウンティ内の他のクラブの活動再開が難しい状況にあったことが推測される。

同じく 1947 年春号では、1947/48 年のシーズンに再開されたトーナメントが、戦後の施設不足の状況から、これまで大会が行われてきた会場を変えざるを得ない状況があったことが報告されている。例えば、ミドルセックス選手権はイーリングからハンプステッドに、サリー選手権はリッチモンドからウィンブルドンに移動した (BAE, spring 1947, p.82)。

また同号では、ノーザン選手権の結果を受け、バドミントンの熱意がランカシャーとチェシャーに広がっていること、またその地域の協会執行委員の熱意を考えると大会が素晴らしいものになったのは驚きではないと述べている (BAE, spring 1947, p.81)。表 1 によれば、ランカシャー&チェシャー協会は戦前にも多くの加盟団体を持っていたが、戦後にはさらに 184 団体増加しており、この地域の活動が戦前から引き続き戦後も活発である様子がわかる。

1947 年 11 月号では、ケントのカウンティチームが海外遠征を行なったことが報告されている。戦前においては、ストローラーズやユナイテッドバンクスのように、ナショナルチームではないチームが海外遠征によりバドミントンを広げてきた。しかし、カウンティチームとしては初めての海外遠征であった (BAE, Nov. 1947, pp.30-31)。表 1 によれば、ケント協会は戦前から多くの加盟団体を持ち、戦後にはさらに 20 団体増加しており、この地域の活動が活発であると同時に積極的な運営を協会が行っていたことがわかる。

1948 年 2 月号では、ロンドンのハムステッドの大会 (トーナメント) において約 400 人という多くのエントリーがあったとことが報告されている。この大会 (トーナメント) はミドルセックス選手権と一緒にになったものであるが、このエントリー数は、戦前にクリスタルパレスクラブ (Cristal Palace Club) が会場

となって行われた時の南イングランドトーナメントに匹敵する規模であった (BAE, Feb. 1948, p.93)。戦前にイングランドの三大クラブと呼ばれ、地域の大会を主催し、イングランドの競技力を支えたロンドンクラブ (London Club)、クリスタルパレスクラブ、ローガン・アンド・アレキサンドラパレスクラブ (Logan and Alexandra Palace Club) の施設は、戦後においても倉庫として使用されておりバドミントンのために使うことができず (Uber, 1949)、ロンドンにおける活動の中心が戦後変わった様子が窺える。

2) イングランドの競技力について

1946/47 年 12/1 月には、第 14 回ウスターシャー選手権大会の R・ニコルスと N・ラドフォード (N. Radford) による男子決勝戦の様子が書かれ、全英選手権大会の決勝戦と同等レベルの試合であったと評している (BAE, Dec./Jan. 1946/47, p.45)。表 3 に示したように、R・ニコルスは全英選手権男子シングルスで 5 回タイトルを獲得した戦前におけるイングランドのトップ選手である。R・ニコルスは 35 歳になり、ケニアで陸軍の業務を 2, 3 年果たして帰国したが、帰国後も練習を行う機会は少なく戦前の競技力維持は難しい状態であった (BAE, Dec./Jan. 1946/47, p.45)。ラドフォードは、イングランド南部のトーキーの出身であるが、若い頃にカナダに移住しイングランドではあまりプレイしてきていなかった選手である。カナダでは、男子ダブルスで 2 回、ミックスダブルスで 1 回優勝している。その後プロに転向し、カナダとアメリカの複数のクラブに所属していた。戦後、カナダ空軍から引退した後、イングランドに残りスポーツグッズ製造会社に勤めた。そして、カナダバドミントン協会からアマチュアとして登録が認められたことによりイングランドでプレイすることになった (BAE, Dec./Jan. 1946/47, p.45)。

1947 年春号には、戦前に活躍した R・M・ホワイト (R. M. White) と A・R・クルーク (A. R. Crooke) が、ノーザン選手権で大きく負けたことが書かれている (BAE, spring 1947, p.82)。

1947 年夏号には、その年の 3 月に開催された戦後最初の全英選手権大会におけるイングランドのシード選手の敗戦の様子が書かれている。H・R・マーズランド (H. R. Marsland) は D・モーハン (D. Mohan) (インド) に敗れ、Q・アレン (Q. Allen) はソーンダール (Thorndahl) (デンマーク) に敗れ、1939 年までの男子ダブルスの優勝者である L & R ニコルス (ニコルス兄弟) はイギリスとデンマークの混合チームであるウイングフィールド (イングランド) とエリックフリーク (デンマーク) に敗れてしまった (BAE, Summer 1947, pp.92-95)。また、B・ユーパーは 3 種目に出場していたが、女子シングルスにおいて M・ウッシング (M. Ussing) (デンマーク) との対戦中に脚の怪我をしたことにより、リタイアすることになった (BAE, Summer 1947, p.95)。

1947 年 11 月号では、このシーズンで引退することになった R・ニコルスについて書かれている。R・ニコルスはまだ 10 代であった 1930 年に、当時選考委員会の委員長であったトマス卿から遠征メンバーに選出され、BA 派遣のカナダツアーメンバー 6 人の内の 1 人として選ばれた。遠征後にイングランド代表となり、それ以降長年にわたりイングランド代表として活躍した。R・ニコルスの引退に際しシェールは、「近年、最も成功を取めた選手がコートから立ち去ってしまうのは短い間のみで、1948 年にはイングランドが失ったタイトル奪還のために復帰してくれることを望みます。」とトマスカップ大会での復帰に期待を込める記述をしている (BAE, Nov.1947, p.30)。

1948 年 2 月号には、新たな選手選考方法によってスコットランドとの対戦の代表選手として選出されたウイングフィールド (H. J. Wingfield)、P・B・ブレイシャイ (P. B. Brayshay)、ミセス・デュリンガー (Mrs. Durringer) 選手について述べている。ウイングフィールド (ケント) は、これまでのシーズンでもイングランドチームのトップにいた選手であった。彼は 1933/34 年にカウンティで頭角を現し、1935/36 年にはナショナル代表に選出され、戦争直前の 2 シーズンはシングルスで頭角をあらわした。戦争が始まっ

た頃は、R・ニコルスがイングランド南部において唯一の選出選手と言われていたが、ウイングフィールドは南イングランド選手権で勝利を収めていた。P・B・ブレイシャイ (ヨークシャー) は、戦前には目立った競技経験はなく、ヨークシャーにおいては定期的にトーナメントに出場していた程度で、ヨークシャーのセカンドチームにも入っていなかった選手であった。過去 2 シーズン (1916/47 年, 1947/48 年)、H・R・マーズランドとのペアを組み、ヨークシャーと北部選手権において男子ダブルスのタイトル保持者となった。ミセス・デュリンガー (サリー) は、インターカウンティ選手権でランカシャーが唯一勝利を取めた 1938 年に、ランカシャーでプレイしていた選手であるが、1947/48 年はサリーの選手であった。補欠選手として選出された 5 人のうち 2 人は、過去国際大会に出場した H・モーランド (H. Morland, ランカシャー) と A・C・G・ブレイスウェイト (A. C. G. Blathwayt, サリー) であった。ミス・ブレイスウェイトは、前シーズン (1946/47 年) のスコットランドとの試合 (マッチ) で、イングランドの選手としてデビューした女性である。残りの 3 人は、新たにチームに選出されたバートウィッスル (ランカシャー)、戦前の学校での経験を除くとバドミントン歴は 2 年しかない W・シュート (W. Shute, ケント)、戦前にはグロースターシャーでプレイしていたサンダーズ (G. F. Saunders, チェシャー) であった (BAE, Feb.1948, p.92)。戦後、新しい選手選考方法により選出されたのは、戦前から頭角を現していたが戦後において代表に選出された選手、戦後に新たに頭角を現し代表に選出された選手、カウンティレベルから代表選手に選出された選手など様々であったと言える。

1948 年 3 月号では、2 月 14 日にフル&イーストライディングスポーツクラブ (Hull and East Riding Sports Club) で行われたイングランド対スコットランドの試合で、B・ユーパーが国際試合 27 回目のイングランド代表として出場し 50 戦連続勝利を収めたことが記載されている (BAE, Mar.1948, p.115)。しかし、翌月に開催された全英選手権大会では、ユーパーは初

日にデンマークのジュニアチャンピオンである19歳のスベンドセン (Svendsen) に敗れてしまった (BAE, Apr. 1948, p.145)。

1948年4月号では、全英選手権大会において、全体的にイングランドの勝利が少なかったことが書かれている。男子はマーズランドとK・L・ウィルソン (K. L. Wilson) が、スウェーデンの選手に負け、混合ダブルスは、マーズランドとB・ユーパーが、ダベルステーン (Dabelsteen) とウッシング (デンマーク) のペアに2ゲームで勝利したが、準決勝でスカールupp (Skaarup) とソーングール (デンマーク) のペアに負けてしまった。ウィルソンとQ・アレンは、ベスト8に向かう試合でミドルセックスの若いペアに苦戦し、素晴らしいプレイはできなかった。ウィングフィールドとミセス・デュリンガーのペアも、サリー出身のペアには勝てたが、ホルム (Holm) とアーム (Ahm) のデンマークペアに負けた。女子ダブルスは、B・ユーパーとQ・アレンのペアが決勝に進んだが (準優勝)、それまでデンマークとの対戦がなかったからである。女子シングルスでは、「予想通り」ブリティッシュの選手は勝ち進めなかった (BAE, Apr. 1948, p.146)。一方で、若手選手が期待された以上にはるかに良い結果を残した。26歳のW・シュートは、将来イングランドを背負う選手だとみられる。彼は、同じ若手のA・J・ストーン (A. J. Stone) と組んだ混合ダブルスで、若いデンマークのペアを破り4回戦まで進出した。そのあと対戦したジェプセン (Jepsen) とスヴェンドセン (Svendsen) のデンマークペアとも接戦を繰り広げた。男子ダブルスでは、シュートとウィングフィールドがスカールuppとホルム (デンマーク) と対戦して、相手を走り回らせる場面があった。その他にも有能であるがまだ知られていない選手として、D・J・ブーマン (D. J. Boorman, ミドルセックス, ミセス・ホーナー (Mrs. Horner, ミドルセックス) をあげている (BAE, Apr.1948, p.147)。

1949年夏号では、全英選手権大会でのB・ユーパーの活躍が報告されている。女子シングルスは予想どおりデンマークの独占であったが、B・ユーパーが昨年

の優勝者のソーングールと対戦し、敗れはしたもののほぼ同等の戦いをした (BAE, Summer 1949, p.182)。そして、ミス・アレンと組んだ女子ダブルスでは、1ゲームを落とすこともなく優勝した。1939年以降女子のカップはデンマークに渡っており「今回もしデンマークが優勝したのであれば、優勝杯は永久にデンマークに渡されることになったかもしれません」と述べている。「ミス・アレンの名前が世界でトップレベルの優勝者名簿に掲載されたのは初めてです。アレンのゲームは、ユーパーが行うクラシカルストロークと交換できるものではありませんが、アレンのガッツと試合に向ける熱意は、彼女に勝る選手はいません」と評している (BAE, Summer 1949, pp.183-184)。しかし、他の種目については「我々イングランドの選手について記述するのは、記録に残すだけの成功がほとんどなく、簡単ではありません。特に男子に関しては報告することがありません」と述べている。

3) 大会について

(1) インターナショナルトライアル

1947/48年12/1月号では、1947/48年にウィンブルドンとウェイクフィールドで開催されたインターナショナルトライアルマッチについて書かれている。この試合は、北部対南部で行われる初めての形式の試合に参加する選手選出のためのものであった。南部側の選出担当者は多くの人に対してチャンスを与えようと考えたため、選手を多く招聘していた。従来の選考方法で選ばれた候補者の半分以上は南側の代表となるのは難しいと言われていた。重点が置かれたのは、若い人で、熱意を持っている人が良いとされた。「この機会は、関心のある人達にとっては間違いなく受け入れられ、選出された人達は不安なくコートに立つことができ、ベストな結果をもたらすのは間違いありません」と評している (BAE, Dec/Jan. 1947/48, p.70)。ここからは、BAEが従来の選手選考方法がもはや良い選手を選考できるシステムになっていないという認識を持ち、イングランドの競技力向上のためには、有望な若手選手の発掘・育成に努める必要があり、新た

な選手選考方法はそのための取り組みであったことがわかる。

（2）北部対南部

1947/48年12/1月号には、バートグリーンスポーツクラブで予定されているファイナルトライアルについて、「とても興味をひく試合になるでしょう」と書かれている。また、「女性は南部が強いように思いますが、男性は北の方が勝ちそうです。選ばれた人達は2月14日にフル&イーストライディングスポーツクラブでスコットランドと対戦することになっています。」（BAE, Dec/Jan. 1947/48, p.70）からは、北部対南部の試合が代表選手選考大会となっていることがわかる。BAEは、戦後の競技力回復のために若手選手を発掘・育成し競技力を向上させなければならないと認識しており、インターナショナルトライアルから北部対南部、そして代表選手選考という新たなシステムに取り組んだことがわかる。

（3）全英選手権大会

1949年夏号には、50周年となる全英選手権大会について書かれている。1948/49年は第一回トマスカップ大会が開催され、そのためにすでにイングランドに来ていた他国の選手を含め合計で49名（男子37名、女子12名）の代表選手が全英選手権大会にエントリーしたため、会場であるハリンゲイアリーナに4～6,000人以上の観客が詰めかけることになった（BAE, Summer 1949, p.181）。全英選手権大会は、世界選手権大会開催やバドミントンがオリンピック種目になる前には、「実質的な世界一を決める大会」と評された。トマスカップ大会の時期は、多くの国々が参加できるように全英選手権大会の日程に合わせて設定された。そうすることにより、多くの国からトマスカップ大会に参加することを期待したのであった（IBF, 8 Mar. 1947）。その結果、全英選手権大会に多くの各国の代表選手が集うことになったのである。こうした大会の変化に対して「9カ国からの選手のエントリーというのは、これまでにない記録である。この

年の全英選手権は、バドミントン界における全ての種族が集まる場であり、これは一年において何度も行われるタイプの大会ではありません。」（BAE, Summer 1949, p.181）と述べている。最も長い歴史ある大会である全英選手権大会が、「実質的な世界一を決める大会」としてのステイタスを獲得していくことに繋がったと言える。

4）バドミントンの変化に対するシェールの所感

戦後、変化するバドミントンの活動状況について、シェールは様々な思いを抱えていた。1947年春号では、イングランドにおいては施設（ホール）の数が少なっているにもかかわらず、3ヶ月の間にバドミントンのプレイが増加していることに驚く様子が伝えられている。また、そのような状況において、ホール高さが不十分であったり、ストロークをするためのスペースが適切であるとは言えない施設で試合を行うようになっていることを問題視している（BAE, Spring 1947, p.81）。

1947/48年12/1月号では、施設不足から、戦前同様のトーナメント数が予定されていないことを残念に思う一方で、トーナメント数が減ったことによりインターカウンティの試合に関心がいくようになる良い面があるとし、インターカウンティへの思いを次のように述べている。

「ゲーム（バドミントン）の初期の頃にはトーナメントの数は少なく、選手達はイベントを待ち望んでいました。第一次世界大戦直前には、高い基準のレベルに達していたことは間違いないでしょうが、それ程多くの選手がいたわけではなく、トーナメントよりマッチが多く行われていました（注2）。（中略）シーズンが始まった時に2人の選手がパートナーを組んで、個々の選手がそれ程強くなくても、コンビネーションを高めていくことによりレベルを上げていくことができました。

最近では、良い選手の標準的なレベルというのは、第二次世界大戦前のレベルよりもかなり落ちていま

す。トマス卿がベストだった時代の榮譽に戻ることはできないでしょう。もし、チームプレーができるようになれば、その頃のレベルに達することができるかもしれません。バドミントンは速いゲームで、パートナーとの間で完璧に理解し合っていることが成功には必要不可欠であるスポーツです。

したがって、インターナショナルトライアルマッチというのは、目指すべき方向です。それは国籍の異なるペアが実際の試合の前に何らかの練習ができるからです。戦前には国際試合においても国籍の異なる者がペアを組むことができましたが、現在（戦後）はできなくなっています。

そのようなことはナショナルチームだけではありません。カウンティマッチは、ペアをテストする絶好の機会です。燃料（石油）の問題点は、カウンティマッチに影響をもたらしていましたが、若い選手層を育てる部分についてはこれ以上のカットは考えるべきではありません。インターカウンティ選手権に参加しているチームの内、約半数は、異なるカウンティのチーム間で行われるホーム&アウェイには参戦していません。（中略）若い選手に必要とされている経験を積ませる目的のために、ホーム&アウェイを行える状態に戻りたいと真剣に考えています。」（BAE, Dec/Jan. 1947/48, p.72）

シェールは、プラスアルファで練習を行うことが可能なマッチやチームプレーの機会を増やすことが、イングランドの競技力を再び高めることになると考えていたことがわかる。また、カウンティマッチに対して、競技力向上だけではなく重要な面があることを強調している。

「いくつかの地域グループにおいて、シーズン終盤のチャレンジタイ（カウンティマッチの一部）を避けようという動きがあるというのは事実です。トーナメントレベルでプレイするメンバーは、カウンティマッチに出なくなるのも事実です。トップ選手の内、カウンティマッチをおまけのように捉えて

いることもあります。その人達は純粋に強さを求めることを期待していますが、これはよくない姿勢です。というのも、各々のカウンティを代表する者に求められる名誉の役割を果たさなければならないからです。それは例え移動に少々不便が生じたとしてもです。我々はみな初めてカウンティを代表することになった時に興奮したのは間違いないことです。カウンティ代表に選出されたということは、我々がプレイしていくキャリアの中で初めて大きな一歩になったと考えられます。カウンティ代表に1, 2のとても優れた選手がいて、そうした人達と一緒に選出されたということも興奮することで、そのチームと一緒にプレイすることを受けて、どこへでも行くべきです。そうしたことをなぜ変える必要があるのでしょうか。通常1シーズンにおいて設定されるカウンティマッチは最大で4から6で、これはカウンティのマッチに出場するために日数を確保するということが、それ程選手にとって難しいものではないというのは確かです。北部においては、カウンティマッチに影響を与えるような日程を設定する人は誰もいないと思います。南部においても同じことが言えると良いと思いますが、南部においてはカウンティの予定があってもそれを一旦横に置いておく（重要視しない）選手が多くいます。」（BAE, Dec/Jan. 1948/49, p.80）

これらの所感からは、シェールがバドミントンの活動の在り方としてチームマッチとりわけカウンティマッチを重要なものであると考えていたことがわかる。また、戦前においてバドミントン活動が盛んであった南部では、戦後にはカウンティマッチをおろそかに考える傾向が強くなり、それに対して不満を持っていたことが窺える。さらに、カウンティチームのあり方に対して、次のように述べている。

「セカンドチームへ『迷惑』をかけないことが行われているようです。セカンドチームの運よりは、ファーストチームを優先すべきです。ファースト

チームに一度以上いるべきでないと言うような人は、イングランドにおけるバドミンントンのレベルを改善するつもりがあるのか聞いてみたいです。

セカンドチームのカウンティマッチというのは、インタークラブにおけるマッチをトップレベルの試合に向けた大きな一歩として経験を持たせるものとして始まったものです。実際、目的に対して最大限のことをしているとは思いますが、選手にとって高いレベルに上るために使われていなかったり、より良い試合の機会が与えられていないのであれば、セカンドチームのカウンティマッチにおける競技的な要素を廃止する時ではないかと思われます。」(BAE, Dec/Jan. 1948/49, pp.80-81)

このことから、カウンティマッチにおけるセカンドチームの対戦が、勝負にこだわるあまりに全体的なバドミントン競技のレベル向上に繋がっていないことに対して、シェールが不満を持っていたことがわかる。シェールは、イングランドの競技力低下の要因として、トーナメントへの参加を重視しカウンティマッチをおろそかにする傾向があること、また、カウンティマッチにおけるセカンドチームの対戦が目前の勝利にこだわるあまりに、全体的な競技力向上に繋がっていないことを指摘している。さらに、カウンティのファーストチームに入る名誉を大切にしない姿勢を問題視し、それが特に、戦前においてバドミントン活動の中心となっていた南部において顕著であることに危機感を持っていたことがわかる。

5. おわりに

1930年代、IBFが設立され、バドミントン活動の世界的な拡大が進んだ。イングランドは、国際的な運営においても、競技力においても、その中心にあった。しかし、1930年代後半に入ると競技力においてイングランドは停滞し始め、戦後にはその中心にないことは明らかとなった。

第二次世界大戦後、戦前においてイングランドのバドミンントンの中心的存在であった南部の活動は停滞

し、中・北部における活動が盛んになった。また各地域で活動の中心となったクラブや施設が移行するなど、第二次世界大戦を機にイングランドのバドミンントンの活動の場は大きく変わった。そうした中、BAEは競技力向上のために、選手選考方法を変更するなどの方策を講じた。しかし、南部においては、BAE加盟団体が減少しただけでなく、個人的に参加するトーナメントを重視しカウンティマッチをおろそかにするなど選手たちの意識に変化があらわれていた。シェールは、そうした状況が、イングランドの競技力復活においてマイナスになっていると考えていた。

イングランドの競技力が停滞する一方で、全英選手権大会はより国際的な大会となった。初めてのIBF主催大会である第一回トマスカップ大会は、できるだけ多くの国が参加できるように1949年3月開催の全英選手権大会に合わせて決勝戦の日程が設定された。それはトマスカップ大会を成功に導く要因の一つであったが、その結果、全英選手権大会に多くの国のトッププレイヤーが参加することになった。そのことは、全英選手権大会が最も歴史ある大会であると同時に、「世界一を決める大会」というステイタスを確立することに繋がる要因になったと言える。

以上の通り、第二次世界大戦後のイングランドでは、競技力は停滞したが、第一回トマスカップ大会の開催の影響により全英選手権大会は世界における象徴的な大会としてのステイタスを確立していったことが明らかになった。

注記

(注1) バドミントン協会(BA)では、1899年12月6日からローンテニス協会発行の『ローンテニス』にバドミントンに関する記事の掲載を始めた。1907年11月号からBA発行の『バドミントンガゼット』が公式機関誌とされた。IBF設立(1934年)に伴い、BAはBAEとなり発行を継続した。

(注2) トーナメントとは勝ち抜きの大会、マッチとは対戦試合を示す。

引用・参考文献

- Badminton Association of England (1939). *Minutes of the Meeting of the Executive Committee of the BAE*, 27 Nov.
- Badminton Association of England (1945). *Minutes of the Meeting of the Executive Committee of the BAE*, 18 Jul.
- Badminton Association of England (1946). *Badminton Gazette*, Nov. : p.23
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Spring: p.82
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Spring: p.81
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Summer: p.92
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Summer: pp.92-95
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Summer: p.95
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Nov. : p.30
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Nov. : pp.30-31
- Badminton Association of England (1947). *Badminton Gazette*, Nov. : p.47
- Badminton Association of England (1947/47). *Badminton Gazette*, Dec./Jan. : p.45
- Badminton Association of England (1947/48). *Badminton Gazette*, Dec./Jan. : p.70
- Badminton Association of England (1947/48). *Badminton Gazette*, Dec./Jan. : p.72
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Feb. : p.92
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Feb. : p.93
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Mar. : p.115
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Apr. : p.145
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Apr. : p.146
- Badminton Association of England (1948). *Badminton Gazette*, Apr. : p.147
- Badminton Association of England (1948/49). *Badminton Gazette*, Dec./Jan. : p.80
- Badminton Association of England (1948/49). *Badminton Gazette*, Dec./Jan. : pp.80-81
- Badminton Association of England (1949). *Badminton Gazette*, Summer: p.181
- Badminton Association of England (1949). *Badminton Gazette*, Summer: p.182
- Badminton Association of England (1949). *Badminton Gazette*, Summer: pp.183-184
- Davis, P (1983). *Guinness Book of Badminton*. Guinness Superlatives Limited: UK
- 鷗木千加子 (2015) ユーバー杯争奪世界女子団体バドミントン選手権大会誕生について—時期尚早とされた女性の大会開催に向けて—。甲南大学スポーツ・健康科学教育研究センター論集 (20) : pp.1-9
- 鷗木千加子 (2017a) 1893年から1934年におけるバドミントン協会の役割と組織の在り方の変容について。スポーツ史研究第 (30) : pp.24-25
- 鷗木千加子 (2017b) 第二次世界大戦下とその直後における国際バドミントン連盟の活動。体育・スポーツ科学 (26) : pp.9-21
- 鷗木千加子 (2018), バドミントンにおける国際統括の形成に関する研究 1893-1949年。神戸大学人間発達環境学研究科博士論文
- International Badminton Federation (1938). *Minutes of the Meeting of the Executive Committee of the IBF*, 29 Jun.
- International Badminton Federation (1947). *Minutes of the Meeting of the Executive Committee of the IBF*, 8 Mar.
- Uber, B (1949). *That Badminton Racket*. Hutchinson's Library of Sports and Pastimes: UK